

鴻 koh

月刊俳句誌

令和4年7月1日発行
(毎月1回1日発行)
第17巻第7号 通巻183号

7 月号

2022

創刊16周年記念号



墨

尺ほどの藤の花房母の忌来

降るは降るは麦生の里の鳥のこゑ

卯月野をゆく木道に沿うてゆく

花蘇枋深々と昼来てゐたり

日雀山雀湿気の溜る土不踏

鳥の声とは里山の夏の色

虎杖をぽきりと折つて阿国の忌

しとど鳴く夏うぐひすの澄むことよ

十七音詩卯月の雨となりにけり

虹二重彼岸此岸を繋ぐごと

手毬麩をばかりと卯月曇なり

薔薇百花百の雫をこぼしけり

濃山吹師の句と距離の縮まらぬ

降るは降るは

主宰作品

増成栗人

ハイビスカ

副主宰作品

谷口摩耶

青紫蘇を刻む夕暮チャイム鳴る

肌寒き五月の雨よ米を研ぐ

カタログのTシャツ選ぶ立夏かな

崖下の径へはらはら夏落葉

ハイビスカス沖繩復帰五十年

桐咲くや祖母の母校は川沿ひに

お隣は一人暮らしや未央柳

アマリリス大きな花を持て余す

吾が辞書を子に譲りたる青葉風

夏の月バツテラ買うて帰りけり

今年には沖繩が日本に復帰して五十年です。沖繩関連のテレビ番組も多いですね。私は四十七年前に沖繩に新婚旅行に行きました。まだ復帰間もない頃で、案内してくれたタクシーの運転士さんが、復帰当時、交通規則が日本式に変わって、事故が多く大変だったと話していました。復帰と共に車が左側通行になったのです。沖繩の人々には想像を超えたご苦労が沢山あったことでしょう。

俳 作品抄

会員選

決心の空へ蹴り出す半仙戯
シュレッター幾度も止まり弥生尽
花筵さがすためある人の顔
剪定の白き切口風まとふ
筍のごろりと並ぶ道の駅

菊池ひろ子
原 光 生
よしの公一
高橋 詩
草柳 忍

谷口摩耶 選

同人選

鳥帰る里曲の風を捕らへては
まなざしのやはらかなる春の鹿
帰る雁ありうたた寝のごとき空
昼酒の店の中まで若葉風
浮世絵と見紛ふ春の太鼓橋
ものの芽や空がいつしか狭くなる
饅頭を土産に座る花筵
ほろほろと日を溜めてゐる土佐水木
飛花落花大樹のものと寂光土
春の昼柱時計のぼんと鳴る
スカーフを背凭れに掛け鷹女の忌

待場陶火
伊藤真代
倉林はるこ
花本智美
田邑利宏
伊藤啓泉
足立枝里
西條弘子
原 達郎
北城美佐
水谷はや子

増成栗人 選

第十六回「鴻」賞 受賞作品

「鴻」賞を受賞して

北村 操

受賞のご連絡は、畏れ多きと驚きと戸惑いばかりでした。

「操リズム」の日々を心地良く通していただくからです。「そのままがいいのよ」の一言で、主宰はじめ多くの方々の慈しみの目送の中で生かされてきた事に気づき感謝が湧いて来ました。ありがとうございます。

ご推挙いただきました皆様にご挨拶を申し上げます。

二度又スの入っている体ですが、第二の人生をいただいている今のこの時の「俳縁」、私は幸せ者です。

麦は穂に

北村 操

数珠玉や丸太を渡すだけの橋
夜釣舟二人は背中合せにて
箱膳がぼつんと蔵に神の留守
鴟の贅ひゆるると風の乾きたる
帯布で作る数珠入春隣



略歴

昭和二十年

終戦で「朝鮮」から帰国、
気賀小学校入学と共に

DDT、ドラム缶の薬湯

を体験する。

平成二年

「青樹」入会

平成二十年

「青樹」終刊

平成二十一年

「鴻」入会

灯りゆらゆら禅寺の春障子
百畳に躡く梅雨の寒さかな
母郷いま川鶉は岩に吹かれたる
母遠くして山吹の一重かな
船の灯のうるみてをりぬ卯月潮
嬰抱きしあとのぬくもり麦は穂に
太宰の忌藻畳に雨強くなる
厨子開く日よ時鳥よく鳴く日
井伊家の寺にがまづみの実の日暮
艫舟くる川風が秋つれてくる
蟬生るる夜はしらしらと濡れぬたる

第十六回「鴻」新人賞 受賞作品

「鴻」新人賞を受賞して
北城美佐

この度は「鴻」新人賞を頂き、大変光栄であると共に身の引き締まる思いです。栗人先生をはじめ、ご推薦下さいました皆様には心から感謝申し上げます。

「鴻」入会当初は、読めない漢字の多い事に驚き、一つ一つ調べながら皆様の句を読むのにも時間がかかりました。それは、新しい言葉を知り、美しい季語と出会う幸せな時間でもありました。やっとスターラインに立てました。これからも御指導よろしくお願ひ致します。

夏が来る

北城美佐

金継ぎの漆よく伸び寒の明け
春霞山羊のチーズと白ワイン
キャンパスの延齡草に春の風
パンジーやイサムノグチの滑り台
揚雲雀市電の走る城下町



略歴

昭和三十七年 札幌市生まれ

平成三十年 「道新文化センター」

花桐句会「入会

令和元年

「鴻」入会

令和四年

俳人協会会員

俳人協会

北海道支部会員

髪型を変へて私の夏が来る
庭先に籐椅子を出しアペリティフ
花手水まねて四葩を飾りけり
打水やお勝手口のある暮らし
アカシアの花重たげな昼下がりに
空蟬や逢いたき人に逢ひに行く
青天の投げ銭ライブ秋の蝶
蕎麦膳の出汁巻き卵江戸の秋
むかご炊き結婚記念恙なし
横浜の高台をゆくインバネス
我が歴史刻む本棚日脚伸び

羽音集

谷口摩耶 選



船橋 菊池ひろ子

伊勢崎 原 光生

我孫子 よしの公一

俳誌のサロン

柏 高橋 詩

半眼の露座の大仏花ぐもり
 車椅子の百寿の母の花衣
 花を買ふ男の背中啄木忌
 決心の空へ蹴り出す半仙戯
 碑の薄き仮名文字暮の春
 還暦は人生半ば山笑ふ
 定刻のラジオ体操蠅汁
 春霞羽衣まとふ天女かな
 桑摘むや母とおんなじ指の爪
 シュレッダー幾度も止まり弥生尽
 囀や選りて越えきし一生かな
 花筵さがすためある人の顔
 桜東風分骨といふ愛し方
 「人さらひ来るよ」の声す春夕焼
 春の湖畔市民マラソン息息息
 風光る新たなペンをペン立てに
 剪定の白き切口風まとふ
 寝転びて臉の裏の花疲れ
 申し訳なささうに降る桜薬
 読みかけの村上春樹春の雷

平塚 草柳 忍

会津 中川幸恵

習志野 野村昌代

喜多方 福地タカ

アクリウム目高一匹棲んで居る
 筍のごろりと並ぶ道の駅
 襟元をゆるめるやうにカラー咲く
 真黒に爪染めあげて路を煮る
 美容院の予約いつぱい春深し
 猫の毛があたりこちらに春近し
 特売ティッシュならば買ひ置く花粉症
 大空の揺れんばかりに卒業歌
 卒業証書名にうつすらとルビのあり
 エプロンを袋代はりに路の臺
 縁側に父の尺八春の雷
 草餅や扁平足のリハビリ中
 花ぐもり窓全開の濃茶かな
 三叉路の馬頭観音雪柳
 おとうとの饒舌となる花林檎
 桜見て梅見て廻る散歩かな
 黄水仙の揺れに風知る家居かな
 茎立ちの蔓ひとかかへ届きけり
 春の畑しづかに動く耕運機
 鈴蘭の芽吹きまだかと地を撫でる

豊川 渡辺とくゑ

札幌 上杉 馨

会津 武藤敏子

札幌 蘭さと子

鶯の声ききに行く野の小径
 牡丹の花瓶を隠すほど開く
 風車に息吹きかけて風生まる
 山寺の木々の起伏に春の雨
 震度三とはバス待ちの花の下
 春休み校庭整備に駆り出さる
 春の雨レトロな駅のホームに居
 母の忌やあの日と同じ春時雨
 春風や開拓記念の大銀杏
 ひらひらと舞ふがごとくにスイートピー
 雪囲ひ外して軽し家の前
 白猫の蛙待つ目の鋭くて
 春の日を浴び子供らは泥んこに
 軒下にだんだん増えし犬ふぐり
 春の夕まだ見つかからぬかくれんぼ
 雪解やパンプスそつと母の留守
 啓蟄や空き家に灯る人の影
 ヒヤシンス入居者のよく変はる家
 長閑なり尺八の音も吹く父も
 万愚節スパイス利かすスープカレー

俳誌のサロン



「横浜③・廃線跡とクイーン」 鈴木 崇

衣更して横浜に来てをりぬ

今井杏太郎

前回に引き続き、横浜へ。
まずはJR桜木町駅に降り立つ。
明治五（一八七二）年、横浜新橋間に鉄

道が開通した。桜木町駅は、当時の初代横
浜駅である。改札前の柱に「歴史展示ギヤ
ラリー」というパネルが掲示されており、
横浜の鉄道史を知ることができる。時代ご
との駅舎のジオラマなど、なかなか凝って
いて面白く、待ち合わせ時間にちよつと眺
めるだけでも楽しい。

ちなみに二代目横浜駅は高島町付近に大
正四年開業、現在の三代目横浜駅は昭和三
年開業である。

次に着く駅は横浜香の雲

星野立子

立子は何代目の横浜駅に着いたのだろ
う。調べてみると、この句は昭和四十五年
の作、現在の場所に到着したのであった。
つい駅前で立ち止まってしまったが、み
なとみらい地区を目指して歩く。

「汽車道」と呼ばれる遊歩道は、かつて
の横浜臨港線の廃線跡。三つの橋梁が残さ
れており、埋立地へと足早に向かう人々を
迎えている。最近までこの鉄橋が線路跡だ
とは知らなかった。

赤レンガ倉庫の近くに横浜港駅跡のプ
ラットホームと屋根の一部が復元されてい
る。輸出産業の生糸などを運んだ横浜の港
湾施設の土木遺産である。

復元されたプラットホームには多くの人
が腰かけ、足をプラプラさせて買い物の中
間のひとときを過ごしている。私もベンチ
に腰を降ろし、もう来ない電車を待つてみ
た。

「あの赤レンガの停車場で二度と帰らな
い誰かを待っている」という桑田佳祐「白
い恋人たち」の歌詞は、この場所を歌って
いることに気付いた。

貨物線は山下ふ頭駅まで山下臨港線が延
伸され、その跡の新港橋梁が山下公園への
遊歩道の一部として今も残っている。高架
のため、港の眺めがよいスポットだ。

街を振り返ると、横浜税関の塔が間近。
前回、神奈川県庁の「キングの塔」を紹介
したが、横浜税関の塔は「クイーンの塔」
と呼ばれている。街側から見ると港に引つ
込んでいるため、キングやジャック（横浜
市開港記念会館の塔）に比べて地味だなと
思っていたのだが、よくよく考えれば、港
を出入りする人が目印とする「港の顔」な
のだから、港側が正面であったのだ。
帽子のようなドームが特徴的。シャッポ
を冠した貴婦人！ようやくクイーンと対面
できた気がした。



横浜税関・クイーンの塔

俳庵閑話



<http://www.haisi.com/koh/index.htm>